

烙淫の姫巫女DL6

RAKUIN NO HIMEMIKO

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

presented by

STUDIO WALTZ

「くくく、女に生まれたことを後悔させてくれようぞ……」

大勢の淫鬼どもに囲まれた麻衣は羽衣軍神の神衣を全ではぎ取られ、生まれたままの姿を晒している。

これから我が身に刻まれるであろう地獄の快楽を想い、麻衣は震えた。

無理矢理されて嬉しいわけではない。

しかし、今まで何度も味あわされたあの快感。

その都度、自分は天津の巫女としてあつてはならない痴態を晒している。

(た……耐えなきや。……感じたりしない、何をされたって……)

麻衣は自らの胸元を抱きしめた。

最後の希望は、アソコの奥に忍ばせた一ひらの梅の花卉。ただ、それだけだった。



はああ
ダメエエエ

プ
ニャ
ニャ
ニャ

ご……
護符が……

うわあああ

護符を失った姉妹への責めは凄惨を極めた。

全身をくまなく愛撫され、熱湯のような精液を注ぎ込まれる。

いつしか愛液は滴るほどに溢れ、亜衣は自ら求めるように身体を悶えさせた。

天神の加護の決して届かぬ地獄の底で凌辱の限りを尽くされ、それでもなお、亜衣はその輝きを失わなかった。
だが、もはや逆転はない。淫界狂乱の宴が続くのみである。



ん
ん

ジュッ

む
ぐ
り

ふ
あ
っ

ズ
ッ

ズ
ッ

い
ち
め
め
め
め

愛犬亜衣の調教日記

「ふはは！亜衣よ！犬は犬らしく同族同士で交わるべきであろっ！」
時平は小躍りしそうな勢いである。

はやる心を抑え、丁寧に施してきた亜衣の犬調教の締めくくりなのだ。
当の亜衣にとっては耳を疑う内容であった。

「な……何を、言っ……」

不意に亜衣の言葉が途切れる。

すぐ後ろに生暖かい息遣いを感じたからだ。

最悪の予感。今までの人生で群を抜いて最悪の予感だった。

「ま……まさか……」

ゆっくりと振り返る亜衣。

果たして、目の前には化け物のような犬の顔があった。

ライオンなどよりはるかに大きい。

「う……そ……」

当たり前のことだが、亜衣は犬のペニスなど想像したこともない。

が、化け物の股間でメキメキと大きくなっていくモノがそれであろう。

力を漲らせて脈動し、反り返ってゆくペニスから目が離せない。

「交わる」という時平の生々しい言葉を思い出した。

悪寒が背骨を駆け降り、尻穴から抜けてゆく気がした。



亜衣の悲鳴が響く。

（犬に入れられてる）

その現実を認識するだけで、亜衣は頭がおかしくなりそうだった。

犬は、無論、前戯などしない。

ただただ射精に向けて、けたたましく腰を振るのみである。

（このままじゃ、だ……出される！）

ピストンが激しさを増し、亜衣の身体が揺さぶられる。

（せ、精液が……来る……犬の……精液が？）

亜衣は絶叫した。

「いやあああああああああー！」

ああ

あ

あああ！！



膣と子宮が犬の精液で満たされるといっおぞましいイメージが脳裏をよぎる。

（……妊娠……しちゃう）

震えて奥歯が噛み合わない。

（わ……わ……たし、……何の仔を？）

ケダモノのピストン運動に、濃厚なオスを感じたのか、

亜衣の子宮はゆるやかに口を開き、精を求めるように蠢いている。

（そんな……、違うー！そんな訳ない！）

望んでない！そんなもの、望むはずがない。

（人間じゃないのよ！）

いや

いやああ

「ひいひいひいあぁあぁあぁーっ!」

亜衣の尻が激しく痙攣する。

絶望と絶頂と。相反する二つの極みが亜衣を狂わせる。

胎内で跳ね回る巨根、噴きつけられる精液。

亜衣の心とは裏腹に、膣は射精を促すべくさらに収縮を繰り返した。

猛々しいオスの射精を受けた時の、健全なメスの反応である。

優れたオスの子孫を残す為のメスの機能。

亜衣にとっては、まさに悲劇としか言いようがなかった。

ひいひい

ヒューン

ヒューン
トル
トル

ああああああ

ヒューン
トル
トル

巫女として身を清めるべき天津の霊泉。

神通力の源とも言えるその泉が鬼獣淫界から流れ込む

膨大な妖気によって無残な変貌を遂げていた。

淫水あふれる淫らの泉である。

甘くかぐわしい空気。麻衣は一息で異変に気付いたが、遅すぎた。

（し、しま……った！）

一瞬にして麻衣の脳裏には、鬼獣淫界で悶え狂った自らの姿が映し出されていた。

幻覚というには余りにも生々しい感覚がよみがえる。

（ああ……いやだ……こんな……）

麻衣は、濡れていた。それもあわれなほどに。

やがて麻衣の愛液を嗅ぎつけたのか、泉からは無数の触手が現れた。





全身を這い回る触手の愛撫に、抵抗はほとんど意味をなさず、
逆に麻衣は感じ始めてしまう。

「ああん！いやあっ！……だめええ！」

なす術もなく挿入を許してしまう麻衣。

懸命に歯を喰いしばっていた回元からは甘い吐息が漏れ、勢い
づく触手は口も膣もアナルも、麻衣の穴という穴を我が物顔で
蹂躪した。

「うっっっ…、んっ…んっ…んっ…んっ…んっ！」

蕩ける女芯からは愛液が溢れ出し、かつての霊泉に滴り落ちた。

イッ
ッ

イッ
ッ

い……いやあ
そこだめえ！

はああん

ノ
ノ

ふむうん



やがて襦ぎの白装束もはぎ取られ、生まれたままの姿を晒す麻衣。
その瑞々しい身体はさらなる快感を求めて、淫らにうねり始めた。

（ああ…、私、もう…）

触手はペニスに酷似している。

にもかかわらず、麻衣は積極的に舌を絡め、手で優しくこぐようにして
射精を促した。

（あ…今…ビクンてした…♡）

麻衣は膣とアナルの触手の動きに合わせて夢中で尻を振った。



ブッ

アッ

ブッ

ブッ

ブッ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

ブッ

うん

ブッ

んっ

姉妹のソープ奉仕

鬼獣淫界との戦いに敗れた姉妹は、鬼や人間相手に性奉仕を強いられることとなった。多くの人間の男どもが望んだのが、巫女奉仕とこのソープ奉仕だった。泡まみれの姉妹が全身を使って身体を洗ってくれるのだ。ソーププレイの手順は一応教えられてはいたが、姉妹にとってはほとんど見よう見まねである。その初々しさも人気の要因の一つだった。

そして、人気のもう一つの要因は、つまり同意なしの本番が許されていたことである。その為、姉妹は「の浴室でほとんど全ての客に犯される」となった。

麻衣は意識を集中して口腔奉仕にふけっていた。

太い幹の根元から亀頭に向けて舐め上げては舐め下す。

そして裏筋の辺りにキスの雨を降らせた。

（ああ……、おっさ……）

麻衣は亀頭を口に含んだ。

舌を絡ませ、顔を上下させて本格的なフェラを開始する。

時折、ペニスがビクンと反応する。

（……ジジがいいの？）

やがて、興奮した男の責めも激しさを増してくる。
麻衣のヒダを丁寧に舐めていたかと思うと、一転、
舌先をとがらせて膣口に挿入させてきた。
「んんっ……はうんん！」

舌はそのまま前後に動き始めた。浅いピストン運動
がもたらす快感に麻衣の腰は震えあがった。
（フェラに……、集中できな……い）

男は膣の浅瀬で舌の出し入れを楽しんだ。
そして大陰唇と小陰唇、大きくなったクリを丁寧に舐め上げる。
一舐めごとに身体を震わせるほどの快感が走った。
甘い喘ぎ声が止まらない。

(ああ、どうしよう……。)「のままじゃ、先にイッちゃう……」
麻衣に先程までの余裕はなかった。

しかし男の勃起はすでに最高潮に達しているのだ。射精は近い。

(早く出して……。ねえ……。でないと、私……。もう……。)

麻衣はピッチをあげた。亀頭は喉奥にまで達している。

「んっ！んっ！……。んんーうんんーふううんんー！」

(イッて……。ねえ、イッてええ)

だが麻衣の願いもむなしく、再び男が伸ばした舌を挿入すると、

麻衣の性感はあっけなく限界を超えてしまった。

さっきとは比較にならぬ程に太く、深い。

脳天まで貫く快感だった。

麻衣は跳ねた。

膣内で舌が激しくうねり、ペニスを振り払って麻衣は叫んだ。

「ヒイー！ああああん！イイ……。イクー！やああー！イイ……。く、イイ……。」

膣がキュッと収縮し、男の顔に愛液が噴きかけられる。

「イクーイクーイクウウウウウー！」

麻衣は、痙攣してアクメをむさぼり、やがて、男の上に倒れ込んだ。

しばらくして、麻衣の息が落ち着いてから、

男はゆっくりとのしかかってきた。

「……」

麻衣は抵抗しなかった。

麻衣の身体にはまだ絶頂の余韻が濃厚に残っている。

麻衣は恋人同士のようなキスをかわし、

なされるがまま身体を開いて男を受け入れた。

「私はどうなってもかまいません！」

…だから、そのコたちには手を出さないで」

天神学園の教師たちは悲慘であった。

生徒たちを守るべく、次々と犯されてゆく。

鬼どもの容赦ないセックス地獄に

その熟れた肉体はひとたまりもなかった。

人間の男相手では決して得られない快楽に

飯島涼子は夢中で鬼の巨軀にしがみ付き、

自ら求めるように尻を振っていた。





激しいピストン運動に亜衣は身体ごと揺さぶられていた。
ドカンドカンとまるで大砲のような衝撃である。

亜衣を犯すという歓喜の真ただ中で、
ふと鬼はある変化に気付いた。

亜衣が尻を少し持ち上げたのだ。

（おおおーついに！墮ちたか！天津亜衣！）

もちろんそれは快感を求めての行為ではなかった。
そうでもしなければ、兇悪な亀頭に膣が
えぐられそうな気がしたのだ。

亜衣は荒れ狂う剛棒に何とか角度を合わせようと
尻を動かした。

鬼は狂喜して、さらに腰を振りたくった。

亜衣も膣を守るのに必死である。

（「……このままじゃ……し……死んじゃう……」）

脳天まで突き抜ける衝撃。

倍加していく快感。

勢いを増す鬼のピストン運動に亜衣の意志は弱まってゆく。

（も……もう……ダメ……）

性の濁流にのみ込まれ、ついに亜衣は女っぽい弱音を吐いた。

「もう……もう、許して」

快感を拒んでいるのか、求めているのか、
亜衣は自分でも分からなくなっていた。





ああ

あん

うあ

ああ



きやあ

あ

やめてえ

いやあ

あ

ふはは

締めつけおるわ!

この

変態め!!

そんな
ちがいま

ひい
い

「オラ！自分で入れてみる！」

「い…いやよ」

口では嫌がりながらも亜衣はペニスを放そうとはしなかった。
(先っぽだけで、こんなに気持ちいいなんて…)

亜衣は腰を落としそうになる衝動に何とか耐えていた。

一筋、二筋と溢れた本気の愛液が鬼のペニスを伝い落ちる。

亜衣の手の中で脈動する熱い肉棒の

なんと魅力的なことが。

「くっ…うっ…」

あの天津亜衣が腹の上で

身体をくねらせて身悶えている。

たっぷり濡れた膣口が亀頭を咥えて放さない。

鬼の愉悦は如何ばかりであるうか。

「ホレー！」

「はうっ！」

軽く腰を突き出すと、亜衣は声を噛み殺してのけぞった。

(…ダメよ、亜衣、しっかりして…、ああ、でも…)

やがて、亜衣は目を閉じ、ゆっくりと腰を沈めていった。

はあ

あっ

はあ



麻衣は目隠しをされ、体の自由を奪われた状態で、男子学生たちに取り囲まれていた。

「あの天津麻衣とできるなんて、夢みたいだ……」
学生たちは、代わる代わるのしかかつては、麻衣を犯した。

同世代の男子たちの無邪気と言っている性衝動に晒されている。
大人たちのネチネチとした愛撫ではない。

その一生懸命さに、麻衣は興奮した。

何人かの精を受け止めた後、やけに大きな亀頭が麻衣のアソコに押し付けられた。

「あ……ん」

（やだ……、大きい……）

麻衣はまだ知らない。

今、自分の膣口にあてがわれている男根が、学生たちのモノでない」とい
いや、人間のモノでもない」とい。

やがて強大なイチモツが肉を押し分けて入ってくる。

「はあ……うー」

期待通りの圧迫感に、思わず悦びの声が漏れ出てしまう。

（「うー」……す……いわ……ああ、す……の）

まだ動いてもいないのに、すさまじい精力を秘めているのが分かる。

麻衣は無意識のうち、「うー」のたくましいモノを奥へ導く……と腰をくねらせた。

「ガ…ガンキ?…ガンキって…何ですか」

「なに? 顔騎も知らんのか?…仕方ねえな、こうするんだよ!」

中年の男はおもむろに麻衣の身体を持ち上げた。

後ろ手に縛られている麻衣にはどうすることもできない。

「ええっ!…やつ、ちよっ…、こんな…」

麻衣は股を大きく開いて、男の顔を跨ぐ格好をとらされた。

（いやー!…こんな恰好…、恥ずかしい）

（み…見られちゃってる、見られちゃってるよお…）

麻衣は足を閉じることでもできず、真っ赤になって震えていた。

股の数センチ下には男の脂ぎった顔がある。

愛液が滴りそうなほど溢れている。

（アソコも、お尻の穴も、大事なところ、全部見られちゃってる）

男がしきりに麻衣の性器の色や形について評している。

（ああ、そんないやらしいコト言わないで…）

熱い息がアソコに当たり、むず痒さに尻の穴がキュツとすぼまる。

（ああ…、もっ…）

無理な姿勢でいるにも限界がある。

麻衣の腰は満面の笑みを浮かべる男の顔に向かって下がっていった。

ふぐう

ヒク

ブル
ブル

ブル
ブル

うああう

ビク

麻衣は脂汗を滴らせ、懸命に耐えていた。

強烈な便意。

人前で漏らすなんてあり得ない。

「ふぐううーうああうー」

麻衣の腸内に貯留しているのは2リットル近い精液だ。

白い悪魔汁は無慈悲に逆巻き、今にも肛門を内側から破ろうとしている。

これ以上奔流を抑えるのは無理だと分かる。

が、人としてそれはあり得ない。

1秒でも2秒でも耐えなければならぬ。



しかし限界はあっけなく訪れた。
聞くに堪えない排泄音が響く。

ブリビイイーブバアアー！ブウウビイイイー！

麻衣は目を見開いて、狂ったように喚いた。

「違っの」だとか「止まってえ」だとか、聞き取れる言葉はほんの一部で
ほとんどは意味をなさない叫び声だった。

白い下痢の奔流は止まらない。

時折、固形物が混じるのは宿便だろうか。

人として、女としての尊厳が尻穴から勢いよく抜けてゆく。

今まで経験したことのない失態。

麻衣の中で解放感、恥辱、そして快感とが理に反して混ざり合う。

犬のように舌を垂らし、麻衣は悩乱した。

あるうことが麻衣は絶頂していた。

涙を流し、鼻水を垂らし、よだれを垂らし、
尿も漏らし、愛液を垂れ流した。

肛門から大量の精液を噴き散らしながら、麻衣は絶頂していた。

烙印の姫巫女は放出が終わるまで長く悶え苦しみ、

やがて気を失って倒れ込んだ。



(これが、天津亜衣のホトか！)
白毛鬼は万感の想いを込めて、突き上げた。
見事にエラの張った亀頭が、狭い肉洞をかき分けて行き来する。
両足を広げた姿勢で亜衣はなす術もなく貫かれている。

亜衣はある衝動を抑えるのに必死だった。

「ああああ……いやっ！いやっ！いやああ！」

少しだけ、ほんの少しだけ、ペニスの動きに合わせて、腰を動かしてみる。
「はっはっはっ……」

亜衣のいいところに肉棒が押し当たり、亜衣は震えあがった。

その姿に白毛鬼は狂喜した。

口では嫌がりながらも亜衣の腰の動きは止まらなかった。

巨根が何度も亜衣の泣き所Gスポットをこすり上げ、そのまま最奥の子宮口に押し付けられる。

それが亜衣にとって一番効くやり方だった。

「ああっ！待って！それダメ！はああん！ダメエエエ！」

その動きを繰り返され、亜衣はこらえ切れずに甘い声を漏らしてしまう。
「はあ……ああっ！……やっ！も、もう……イ……イ……」

(イ……イク、……このままじゃ……、イッちゃう)

亜衣は自身のほとばしるような淫欲に耐えねばならなかった。
しかし耐えれば耐えるだけ激しい絶頂が待っているだろう。

白毛鬼は、至高のその瞬間に向かって、とどめとばかりに腰を突き上げた。



あ
あ
あ

い
や
あ

は
あ
あ
あ

ハア
それダメーッ!!

ハア

ハア

ハア

ハア

ヤダメ...

ち...待...



無残にも犯され尽くした亜衣。

時平は大きく両腕を広げた。

「聞けい！皆の者よ！」

大音声である。

「千年の宿願が成就した！我はここに宣言する！」

躍動する時平の姿に鬼どもは高揚した。

「今より新たな王朝が始まる！」

淫ら一尊！真の鬼獣淫界の始まりである！」

鬼どもの咆哮が地鳴りとなって大地を揺るがせる。

時平は亜衣の尻にチラリと目をやった。

「神もつらやむであるっ！」





<あとかき>

この度はつたないSTUDIO WALTZ本をお買い上げいただき誠にありがとうございます。

今回、電子化にあたり、同人誌版のデータをそのまま使えばもっと早かったのですが、せっかくだし納得いくところまで手直ししようと思ひまして、修正に次ぐ修正を繰り返しました！

その割に、そんなに変わってないという・・・(^^;)

それでは、また、がんばります！

次は、烙淫DL7です！

文章作成におきまして、名乗るほどの者ではございませんさんにご協力いただきました！ありがとうございました！

発行： STUDIO WALTZ

Mail： studiowaltz@yahoo.co.jp

発行： 初版 2019/04/29（丸正インキ有限会社様）

電子化 2021/05













































presented by
STUDIO WALTZ
烙淫の姫巫女DL6